

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 7 月 31 日現在

機関番号：35302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26420656

研究課題名(和文)被災都市の復興における建築技術者の活動とその果たした役割に関する史的研究

研究課題名(英文)A Historical Study on the activities and the role that architectural engineers in play the reconstruction of the affected city

研究代表者

李明(LI, MING)

岡山理科大学・工学部・准教授

研究者番号：30341233

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：広島復興における建築家・建築組織の活動実態や果たした役割について明らかにし、このような作業を通じて都市復興に関する研究により総体とした新たな内容を加えることができたと思う。こうした復興における個々の建築家・建築組織の活動とその果たした役割、とくに地元の建築技術者の活動と役割までに視点を広げた都市復興に関する研究は、日本の学界にはなかったが、新しい貢献に値する。

研究成果の概要(英文)：In this paper, we look at the architects and design offices involved in the reconstruction architecture and design of Hiroshima, and will attempt to classify the construction documents. 1)I will review and supplement the reconstruction process of Hiroshima. 2)To identify the Hiroshima reconstruction architecture and its designers from 1945 to 1955. 3)I will discuss the construction documents of architect and/or the design office

研究分野：建築歴史意匠

キーワード：災害 復興 建築家 建築技術者 役割

1. 研究開始当初の背景

(1) 復興と建築技術者に関する研究の可能性

被爆後 70 年は草木もはえぬ、と言われた広島復興は世界注視的であり、日本中からも建築のメッカとして熱い視線が注がれていた。言うまでもなく、昭和 20 年 8 月 6 日にこの都市の上空で投下された原子爆弾の歴史的な意義を重要視しているからである。原爆投下の歴史的な意義については、これまでに社会学分野で多くの問題が論じられ、多くの人々にとって周知の事柄である。また復興過程についても新聞や戦災復興誌などに多く特筆されている。ところで、建築家の活動として、例えば丹下健三の設計による広島平和公園、村野藤吾の設計による広島世界平和記念聖堂の建築などについては多く研究されているが、広島地元の建築家またはその他の建築家や建築組織の活動についてはほとんど言及されていなかったのである。広島復興について河内義就(戦前満州国郵政局経理科営繕技師、終戦後広島に根を下ろした建築家)は、「免も角当時の地元建築設計事務所は市内の主だった建物の 70% 位手掛けた様に思う。」(『よむせよ』広島建築行政協会、昭和 58 年)と述べているように、広島復興を語る上で地元建築組織の活動は無視できない。これらの建築設計事務所は現在も広島の建築界をリードしている。

戦後広島初の暁設計事務所の設計活動については李がかつて「終戦直後の広島における暁設計事務所の活動について」(日本建築学会計画系論文集第 537 号 2000 年 11 月 pp311-318)として公表しており、工学に限らず、人文系も含めた学界からの忌憚なき意見を受けようとしている。

その他の建築事務所や建築家はもちろん、さらに新しい発掘も視野に入れながら、継続して広島復興における建築家・建築組織の活動実態や果たした役割について明らかに

する。このような作業を通じて都市復興に関する研究により総体とした新たな内容を加えたい。こうした復興における個々の建築家・建築組織の活動とその果たした役割、とくに地元の建築技術者の活動と役割までに視点を広げた都市復興に関する研究は、日本の学界に無い。

(2) 中央と地方、有名と無名な建築技術者像の多面理解

日本の近代建築の発展に、中央の有名な建築家・建築組織が大きな役割を果たしたことは衆知のことであり、近代建築史の研究においても重視されている。しかし、地方の建築家・建築組織の活動は、これまでの日本の近代建築史研究の中であまり重視されてこなかった。

実際には多くの建築家・建築組織の活動があり、彼(女)らは日本建築の流れを左右するほどの影響力はなかったが、地方の都市と建築を語る上で欠くことのできない存在である。このような地元建築組織の旺盛な活動があったことは注目に値するし、地方都市の復興を巡る研究対象としては見逃せない。

(3) 研究のねらい

このような地方の都市復興における建築家・建築組織の活動を、中央の建築家、有名な建築組織だけに絞って把握しようとするアプリアリな読み取りに陥ってしまいがちである。しかし本申請研究は、こうした地元建築組織の活動に対して細密なまでのアプローチを試みることで、地方都市の復興における建築技術者の活動の多面的な位相を浮かび上がらせるものである。

2. 研究の目的

歴史的に見ると、戦災や自然災害で都市は一瞬にして廃墟になってしまうことが多い。被爆都市広島や東北の震災都市等がその事例である。これらの被災都市の復旧、復興における建築技術者の役割は無視できない。広島

は被爆からまもなく 70 年を迎えようとしている。廃墟から立ち上がった広島復興史は東北の震災復興にとって貴重な参考資料になるのは言うまでもない。本研究は、被爆都市である広島の復興における建築家・建築組織の活動を中心に、戦後の廃墟から立ち上がる復興建設における建築技術者の活動形態とその果たした役割について解明しようとするものである。そして、その成果を東北の震災復興における建築家または建築組織のあり方や果たすべき役割は何か？等と結び付けることを目的とする。

3. 研究の方法

次の研究段階により調査を遂行する。調査対象は個人建築家のみならず、行政部門、設計組織、ゼネコン等に所属している建築家または技術者も含む。既存の関連研究蓄積から、広島の戦災復興に関わる研究と資料の所在を把握する。個々の建築家・建築組織と戦災復興との関わり、復興事業または復興建築の計画、実施過程、利用状況の検討から、設計活動と復興事業との応答関係を比較考察する。建築家・建築組織の活動によって復興建設にもたらされた影響を検討する。都市・建築史分野の成果に、都市復興と建築技術者の活動を巡る応答関係を位置づける。

具体的方法は、公文書館等所蔵の行政文書、新聞、統計データ等の文献調査と、現地でのヒアリング調査等による。対象時期は建築技術や物資が乏しい終戦直後の復興期 10 年間とする。

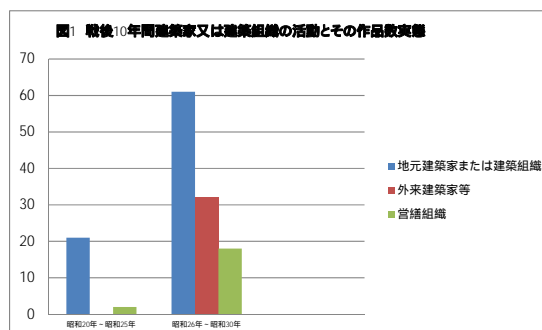
まず広島の復興にかかわった建築家もしくは建築組織の全容の把握を行う一次調査を実施する。次に二次調査として個々建築家や組織の活動事例について明らかにする文献調査と聞き取り調査を実施する。二次調査に適した事例を抽出する際には一次調査で得た成果から典型的に分析した結果をもちいる。上記過程を経て、復興における建築家や建築組織の活動の実態は明らかとなるが、

三次調査では復興当時の社会背景や社会応答関係を明らかにする文献調査、現地調査を続けて行う。戦災復興史の研究状況にこれらの位置づけを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 広島の復興建築とその設計者の把握

ここで、被爆直後の広島にはどのような建物が立ち上がってきたのか。戦後 10 年間の建築家または設計組織とその作品をまとめた。今のところ終戦直後の 10 年間の復興建築とその設計者が確認できる建物は 134 件である。その中、広島の地元建築家・建築事務所・県市営繕組織の設計が 102 件であり、大手ゼネコンの広島支社など外来の建築家もしくは設計組織の設計によって建てられているのが 32 件であることが分かる。



戦後 10 年間の復興建築とその設計者を所属によりまとめると図 1 のようになる。所属は地元建築家または建築組織、外来建築家等、営繕組織の 3 つに分け、時期は昭和 20 年から昭和 25 年、昭和 26 年から昭和 30 年と 2 区分した。図 1 のように、昭和 20 年から昭和 25 年までの活動を見ると外来建築家は 0 件、地元建築家または建築組織は 21 件、官公庁営繕組織は 2 件であったことが分かる。昭和 26 年から昭和 30 年までの活動を見ると、外来建築家は 32 件、地元建築家または建築組織は 61 件、官公庁営繕組織は 18 件であったことが分かる。

(2) 建築家又は設計組織の活動実態

まず、建築家または建築組織の活動をその所属により地元、外来、営繕組織と 3 つに分け、それぞれの設計作品数の比率を示すと昭

和 20 年から昭和 25 年までの 5 年間のグラフは図 2、昭和 26 年から昭和 30 年までの 5 年間のグラフは図 3 になる。図 2 のように終戦直後の 5 年間は外来建築家の活動は 0%であった。地元の建築家の活動が 91%を占めており、ほとんどの復興建築は地元の設計者によるものであったことが分かる。図 3 のように、昭和 26 年から外来建築家の活動が少し増えて 29%を占めているが、やはり地元の建築家の活動が 55%を占めていることが分かる。

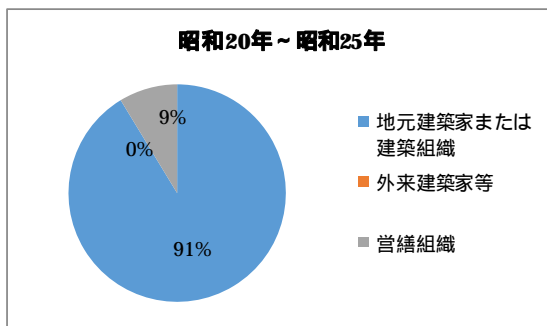


図 2 昭和 20 年～昭和 25 年における建築家の活動実態

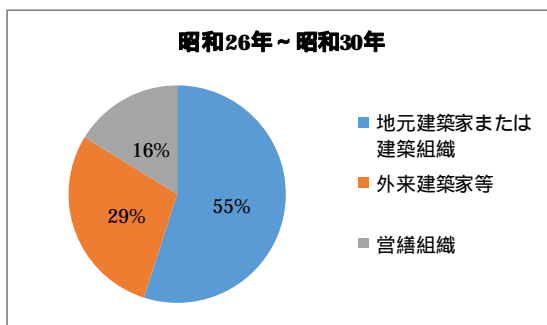


図 3 昭和 26 年～昭和 30 年における建築家の活動実態

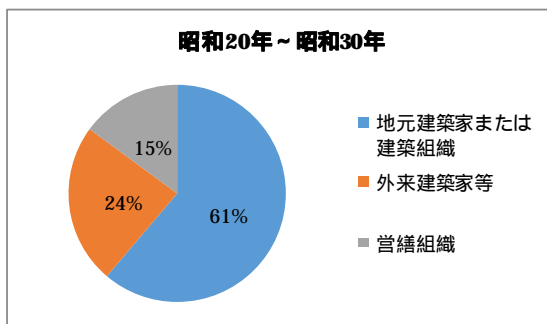


図 4 戦後 10 年間ににおける建築家の活動実態

被爆直後広島において活動した地元建築家及び設計組織をその所属によって地元建築家・建築事務所、県市の営繕組織・他、大

手ゼネコンの広島支社などをまとめると、地元の建築家・建築事務所の活動として、暁設計事務所、上野勇、河内義就建築事務所、村田・大旗建築事務所、杉田三郎建築設計事務所、白土建築士事務所、木村俊雄建築設計事務所、ARB 建築設計事務所の活動が確認できるが、被爆直後の昭和 20 年から 25 年までの活動として暁設計事務所の活発な活動が目目される。県市の営繕組織の活動として、広島県営繕課、広島市営繕課、中国四国地方建設局営繕部、広島市水道局施設課、広島県住宅公社、広島郵政局建築部、中国電気通信局建築部の設計活動が確認できるが、被爆直後における広島地方の営繕組織の活動が戦前に比べて目立っていることが分かる。

次に、外来建築家の活動を建築家・建築事務所、国の営繕組織とゼネコン、外国人建築家によって三つに区分して整理すると、東京・大阪の中央地区からの建築家・建築事務所の活動として、丹下健三、前川国男建築事務所、田中良太郎、村野藤吾、西村好時建築設計事務所、山下寿郎建築設計事務所、石本喜久治、笹口正夫、稲葉登、黒川卯三郎、井戸田建築設計計算事務所の活動が確認できる。国の営繕組織とゼネコンなどの活動として、最高裁判所、水野組、藤田組、共立組、三菱銀行営繕部、富士銀行営繕部、鉄道管理局施設部建築課、浅野組、戸田組、創建工業、日本電電公社施設部、竹中工務店、スタンダード石油会社などの設計活動が確認できる。

大手ゼネコンの広島支社の活動として、大成建設広島支店、清水建設広島支店、日本電建広島支社の設計活動が確認できる。そして外国人建築家としてイサム・ノグチ、A.B.C.C 建設部の設計活動が確認できる。

このように被爆直後の広島における建築家の活動実態を考える時、被爆前の外来建築家の主導的な役割とは異なる特徴として、地方の建築家・建築組織の活動が目目される。被爆直後期には復興院の囑託による丹下健

三の調査活動があり、丹下は広島の大コンペにおいて活躍し、見事に広島平和記念コンペで一等入選した。このことは日本だけでなく世界中にも知られており、彼の果たした役割は大きい。その以外は、ほとんど地元建築組織の活動が目立つことが分かる。

大手ゼネコン等が広島に支店を構えたのは広島ピースセンターや平和記念聖堂が立ち上がり始めた昭和30年代初頭からである。言うまでもなく被爆直後の焼け野原の中で建築活動を行ったのはほとんど地元の建築組織であった。このような地元建築組織の旺盛な活動があったことは注目に値する。

戦後広島初の暁設計事務所は、被爆後の広島における最初の設計事務所として誕生し、その後の数多くの建築事務所形成の原点となった。その設立は、広島県建築士事務所協会の前身広島建築家クラブの結成と発展に大きな影響を及ぼした。暁設計事務所において、主要な建築活動を行ったのは村田正、河内義就、大旗正二の3人の建築家であり、彼らは戦後広島建築界のルーツとして、広島の復興建築において大きな影響力を有した建築家であり、彼らが関係した復興建築は、当時の背景の中で数多く、個々の建築には3人建築家の心血が注がれている。特に、大空間の木造建築の設計に挑戦した児童文化会館、周囲環境との調和を深く意識してデザインした戦後初の民間RC造事務所建築である農協ビル、病院に薄い庇を付けようと厚さ4センチメートルのコンクリート打ちに挑戦した社会保険広島市民病院などの建築は、広島平和公園、広島世界平和聖堂等のように注目されるほどの建築物ではなかったが、広島の復興を語る上で重要な意味を持つ建築物であるだけでなく、日本の戦後建築史を語る上でも興味深い建物であると考えられる。又、村田は長島局長に記念聖堂建設の計画を伝える役割を担うことになり、全国初の民間RC造事務所への資材配布を求め努力する等、積

極的な活動を行ったことなどを評価したい。

(3) 果たした役割

まず、復興過程において多くの建物が建設されるが、それらには地元建築事務所が大きな役割を果たしており、特に暁設計事務所を初めとする地元建築家・事務所の活動が活発的であったことが見て取れる。次に、昭和24年8月6日広島平和記念都市建設法が公布され、平和記念聖堂コンペと広島ピースセンターコンペが実施されるが、この2大コンペには、全国から多くの建築家または未来建築家の卵達が熱意を持って争って参加し、見事な日本の建築の在り方を示したのである。この2大コンペは、広島の復興の本格化を促す多大な役割を果たしただけでなく、戦後日本建築の発展に大きな役割を果たしたと言っても過言ではないだろう。被爆直後期には復興院の囑託による丹下健三の調査活動があり、丹下は広島の大コンペにおいて活躍し、見事に広島平和記念コンペで1等入選した。このことは日本だけでなく世界中にも知られており、彼の果たした役割は大きい。そして、外来建築家・事務所・大手ゼネコンの進出が本格的に増えたのは、広島ピースセンターや平和記念聖堂が立ち上がり始めた昭和30年代初頭からであることが分かる。

全体的にみると、言うまでもなく被爆直後の焼け野原の中で建築活動を行ったのはほとんど地元の建築組織であったことがわかる。このような地元建築組織の旺盛な活動があったことは注目に値するし、地方都市の復興を巡る研究対象としては見逃せない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

(1) 李明, 石丸紀興, その他2名「宇品凱旋館建築について」日本建築学会技術報告集第55号に掲載決定(2017.10)

(2) LI, Ming 「A Historical Study on the activities and plays the role of architectural engineer in the reconstruction

of the affected city: A-bomb cities of HIROSHIMA Reconstruction and architects」ETIC/RSET/SPSD Symposium 2016, Kanazawa, December 6, 2016

(3) LI MING 「STUDY OF A SERIES OF SPEECHES WALTER GROPIUS IN JAPAN」[INFORMATION]An International Interdisciplinary Journal Vo1.18No.8,3419-3427 (2015.8)

(4) 李明, 石丸紀興「建築家豊田勉之の経歴と建築活動について」日本建築学会計画系論文集第79巻第703号pp.2077-2084 (2014.9)

(5) 李明「原爆傷害調査委員会 (ABCC) 米国人独身寮の建築と前川國男」日本建築学会技術報告集第20巻第44号PP791-794 (2014.6)

〔学会発表〕(計 4 件)

(1) 村上茂輝、李明、石丸紀興「広島博物館基本計画案と黒川紀章 - 比治山芸術公園の形成と建築家黒川紀章に関する研究 - 」日本建築学会中国支部研究報告集第 39 巻 pp. 961-964 (2016.3)

(2) 中本清彦、李明「建築家杉田三郎の建築活動について」日本建築学会中国支部研究報告集第 39 巻 pp. 957-960 (2016.3)

(3) 李明「建築家柴田斉男の建築活動について/被災都市の復興における建築技術者の活動とその果たした役割に関する史的研究 その 2)」日本建築学会中国支部研究報告集第 39 巻 pp. 953-956 (2016.3)

(4) 李明「広島の復興における建築家・建築組織の活動形態/被災都市の復興における建築技術者の活動とその果たした役割に関する史的研究 その 1)」日本建築学会中国支部研究報告集第 38 巻 pp. 933-936 (2015.3)

〔その他発表〕(計 3 件)

(1) 李明「豊田勉之の作品とそのデザインの特徴」(広島地域におけるある建築家と建築活動を語る～豊田勉之を中心として)時代を語り建築を語る会(第10回)、東広島市

郷土研究会招待講演(2015.9)

(2) 李明、村上茂輝、中本清彦、神崎脩司「世界平和記念聖堂設計競技の入賞案にみる「日本的」建築理念とその手法」2015.11, OUS フォーラムポスター展示発表

(3) 李明「都市復興と建築技術者の役割～広島復興における建築家の活動に着目して～」2014.11, OUS フォーラムポスター展示発表

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
李明 (Li Ming)
岡山理科大学・工学部・准教授
研究者番号：30341233

(2) 研究分担者
該当なし

(3) 連携研究者
該当なし

(4) 研究協力者
村上茂輝 (Shigeki Murakami)
中本清彦 (Kiyokazi Nakamoto)